

## プラトン『国家』における魂

小山義弘

### 〔0〕

プラトンは、『国家』において△正義▽について論じている。そして、△正義▽を魂の内に求め、△国家▽と△個人▽の魂を対応させながら、△正義▽の問題を明らかにしようとしている。

ここでは、このようなプラトンの『国家』における魂の問題を取り扱いたい。そして、魂に関する問題のうちで、行為との関連において、魂を論じたい。ところで、プラトンは『国家』において所謂「魂の三分説」を唱えている。そこで、この考察は、三分説の立場に立ったプラトンの△魂▽と△行為▽の関係を特に△正義▽と△不正▽の点から、明らかにすることを目的としたい。

### 〔1〕

先づ、魂の「部分」をどのように考えるべきかという点を明らかにする必要がある。

プラトンは『国家』第四巻で先行する国家の考察を踏まえたうえで、個人の問題に移る。そこで、国家の有する「学を好む性格」「気概的性格」「金銭を好む性格」が個々の成員に由来することを指摘したうえで、われわれがそのような三種類の性格の行為をなす場合に、「魂全体によってなすのか、あるいは、それぞれ別のものによってなすのか」(cf. 436a, b)という問題をたてている。そして、「同じものが、同時に相反することをしてたりされたりすることはできない」(436b, cf. 436e, 437a)という

原則をもとに、三部分のいわば「内的対立」状態を提示することによって魂の三部分を確立するのである。

ところで、確立された「三部分説」はプラトンの与えた $\wedge$ 正義 $\vee$ の定義を受け入れるものでなければならぬ。プラトンによれば魂における $\wedge$ 正義 $\vee$ は魂の各部分が「自分の仕事」をすることによって成立するものである (cf. 441d-e)。したがって、各部分の「自分の仕事」というものを有意味に語れるものでなければならぬということである。そしてこの「自分の仕事」はプラトンの言葉からすると $\wedge$ 支配 $\vee$ ということに関連させて解されるべきものである (cf. 441e, 442a-b)。こういった点に留意して、以下魂の $\wedge$ 部分 $\vee$ について考えてみたい。

先づ、我々は $\wedge$ 部分 $\vee$ を単に能力や機能といったものには還元できないのである。何故なら、プラトンが立てた問いは「魂全体によって」か否かという選択であった。この「魂全体によって」は否定されるのである。したがって、この否定された「魂全体」を能力や機能の集合とみなすのでなければ、肯定された $\wedge$ 部分 $\vee$ についても単に能力や機能とみなすわけにはいかないのである。プラトンが魂を単に能力や機能としてのみ認めていたとは考えられない。またさらに能力にせよ機能にせよ、それ自体だけで互いに対立し争うことはない。対立し争うことが可能になるためには、各 $\wedge$ 部分 $\vee$ に共通の基盤が必要である。その基盤は第九巻の記述に見い出すことができるであろう。それによると、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ も $\wedge$ 気概的部分 $\vee$ も、第四巻で記述される機能の他に、固有の $\wedge$ 欲望 $\vee$ を有するものである (cf. 580d)。そこで、たとえば、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ と $\wedge$ 欲望的部分 $\vee$ の対立においては、両部分の $\wedge$ 欲望 $\vee$ が対立し争うと考えられるのである。したがって、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ は理知的機能あるいは能力と固有の $\wedge$ 欲望 $\vee$ を有するものと考えられなくてはならない。だからこれらを一つに合わせるものが必要であり、それが魂なのである。三種の機能および欲望は魂の三部分に帰せられるであろう。これら

の点からして、ここで $\wedge$ 部分 $\vee$ と言ってきたものは魂に帰属するものの分割ではなく、何らかの意味で魂本体の分割の結果なのである。

しかし、三つに分解可能な存在から魂は成立しているのであるか。独立し分解可能な意味で $\wedge$ 部分 $\vee$ を解することの主要な根拠は、魂に対する国家の三種族との関係であると思われる。そこで、国家と個人の対応関係が完全なものであるか否かを調べてみたい。

国家と個人に完全な対応関係が成立するのであるならば、それは $\wedge$ 正義 $\vee$ に関してのみならず、 $\wedge$ 不正 $\vee$ に関しても同様に考えられなくてはならないであろう。ところで、プラトンは $\wedge$ 正しい国家 $\vee$ を建設した際に、国家がどんなものであれ国家として成立するための必須の構造と、その国家が正しい国家であるために各構造に帰属すべき人間の資格の二つを決定したのである。すなわちここで言う構造とは $\wedge$ 守護者 $\vee$  $\wedge$ 補助者 $\vee$  $\wedge$ 生産者 $\vee$ という三種族として規定されるものである。したがって、どのような国制の国家にせよ、原則的には構造上の三種族は存在するものと考えられる。 $\wedge$ 正しい国家 $\vee$ と $\wedge$ 不正な国家 $\vee$ を相異なるものとしているのは、これらの構造的単位を構成している人間の相異なる。

そこで、 $\wedge$ 国家 $\vee$ と $\wedge$ 人間 $\vee$ が完全な対応関係にあるのであれば、次のようなことになってしまうであろう。先づ、 $\wedge$ 正しい人間 $\vee$ と $\wedge$ 正しい国家 $\vee$ の対応関係は $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ が $\wedge$ 支配者 $\vee$ に、 $\wedge$ 気概的部分 $\vee$ が $\wedge$ 補助者 $\vee$ に、 $\wedge$ 欲望的部分 $\vee$ は $\wedge$ 生産者 $\vee$ に対応する。これに対して、 $\wedge$ 不正な国家 $\vee$ と $\wedge$ 不正な人間 $\vee$ の場合はこのような対応関係は認められないのである。 $\wedge$ 不正な国家 $\vee$ において、 $\wedge$ 正しい国家 $\vee$ の $\wedge$ 支配者 $\vee$ を構成する人間は存在しないことも可能と考えられるが、その点からすると、 $\wedge$ 不正な人間 $\vee$ は $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ を持たない場合があるということになってしまうだろう。このことは、対応する国家を構成する人間に着目して言えることであるが、国家と個人の完全な対応関

係に基づいて魂の三部分が独立可能であるとするのは、この人間に着目してのことなのである。ところで、以上のように考えると、 $\wedge$ 不正な人間 $\vee$ にはその魂が $\wedge$ 欲望的部分 $\vee$ だけであることが可能になってしまふ。しかし、プラトンが三部分の確立の手續きによって取り上げた $\wedge$ 魂 $\vee$ は、どのような人間にも適用されるべきものである。

このよう考えると、魂の $\wedge$ 部分 $\vee$ は単に機能や能力でもなく、また完全に独立可能な部分に還元することもできないということになる。そこで、魂の $\wedge$ 部分 $\vee$ は魂が三つ区分され、それぞれに機能が割り当てられたものだと言える。そのことは、 $\wedge$ 欲望 $\vee$ について考えてみることで明らかになる。第六巻でプラトンは $\wedge$ 欲望 $\vee$ について次のように語っている。「我々は、いくつかの欲望がある一つのものへはげしくむかえばむかうほど、ちょうどそこへ水路によってひかれた水の流れのように、他のものへの欲望はそれだけ弱くなるということを知っている」(485d)。つまり、 $\wedge$ 欲望 $\vee$ それ自体は一本の水の流れのようなものであり、その総量は一定であると考えられるのである。したがって、たとえば $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ の $\wedge$ 欲望 $\vee$ が増大すればほど、他の部分の $\wedge$ 欲望 $\vee$ が減少する。ある部分の欲望の強さは、その部分だけで決まるのではなく、他の部分との関係で決まるのである。そこで、もし部分間に存在の点で境界があるとすれば、一定の総量を持つ $\wedge$ 欲望 $\vee$ それ自体というものはないであろう。無論、全く無限定の $\wedge$ 欲望 $\vee$ それ自体というものは、現実的には現われない。現実的に我々に明らかになるのは、何らかの限定されたものであり、各部分に固有な $\wedge$ 欲望 $\vee$ としてなのである。そこでもし仮りに $\wedge$ 魂 $\vee$ を大きさのあるものと仮定すると、その限定を与えるものは、 $\wedge$ 欲望 $\vee$ の「出口」のようなものであり、一つではなく三つ考えられるべきなのである。したがって、我々は魂に感覚的事物のような大きさを考えることはできないにしても、魂をいわば実体的なものと考えるべきであるならば、少なくとも三つの $\wedge$ 欲望 $\vee$ を限定する部位を指定し、区分しなければならぬの

である。そして、このように区分された部分が各機能を担うものである。以上のように考えられた魂の部分は先に述べたように $\wedge$ 支配関係 $\vee$ が意味に語られなくてはならないものである。この $\wedge$ 支配関係 $\vee$ によって、 $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ や $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ が語られるからである。そこで、次にこの問題に移りたい。

## 〔2〕

プラトンは「大工が大工の仕事をする」といった行為は $\wedge$ 正義 $\vee$ の「影」であり、真実の $\wedge$ 正義 $\vee$ は魂に求められるといている (cf. 443c)。つまり、正・不正の行為の成立は魂によるのであり、行為の「原因」は魂のあり方にあるのである (cf. 443b)。そこで、正しい行為が正しい魂の「影」であり、正しい行為の成立の原因が「魂の内の正義」に求められるのであれば、まず、「影」のもとであり、「原因」であるところの $\wedge$ 魂 $\vee$ に関して、 $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ 及び $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ のあり方がどのようなものであるのかを考えてみたい。

## (1)

プラトンの定義によると、 $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ とは「魂の各部分が自分の仕事をする」ということに基づくものである。そして、「自分の仕事」とは「支配」に関して考えられる。この点からすると、 $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ とは、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ が支配する魂であるということになる。そこで、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ が支配することは、この部分に帰せられる理知的機能によって「知恵があるものであり、魂全体を配慮するものである」がゆえに、 $\wedge$ ふさわしい $\vee$ とされたのである。

ここで問題になるのは、このいわば $\wedge$ 支配 $\vee$ の資格条件である「知恵がある」ということが、厳密な意味での「知識」に限定されるのかという点である。しかし、われわれは、限定されるべきではな

いと考ええる。その理由は、第一に、プラトンが考えた $\wedge$ 正しい国家 $\vee$ が成立するためには限定されないということである。何故なら、 $\wedge$ 補助者 $\vee$ 及び $\wedge$ 生産者 $\vee$ の階層を形成する人間が $\wedge$ 知識 $\vee$ を持たないがゆえに不正な人間であるならば、そもそもプラトンが考えた $\wedge$ 正しい国家 $\vee$ は成立しないことになるからである。第二に、アイデアを認識する以前の哲学者も、もし $\wedge$ 知 $\vee$ が限定されるならば、不正な人間になってしまうということである。第三に、少なくとも、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ 以外の部分は感覚界において成立するものに関わるものであり、それには「知識」は対応しないということである。したがって、 $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ であるためにはその $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ が「知識」だけではなく「正しい思わく」を持っていても魂の内 $\wedge$ 支配 $\vee$ する資格を持つと考えられる。

さて以上において、 $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ の $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ のいわば資格条件を明らかにした。しかし、こうした資格が満たされること、すなわち、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ が「正しい真なる思わく」を持つことそれ自体は、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ の $\wedge$ 支配 $\vee$ には不十分である。というのは、「正しい思わく」を持っていないが、いわば魂の内的対立の状態において $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ が $\wedge$ 欲望的部分 $\vee$ に敗北し $\wedge$ 欲望的部分 $\vee$ の $\wedge$ 欲望 $\vee$ に沿った行為が成立するということも考えられるからである。このような状態こそプラトンが魂の三部分を識別する際に示した状態なのである。

では、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ が実際に $\wedge$ 支配 $\vee$ するか否かは何によるものであろうか。我々は部分間の「内的対立」を見たときに、その対立を各部分のもつ $\wedge$ 欲望 $\vee$ に還元した考えた。というのも、先に述べたように、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ の理知的機能そのものが $\wedge$ 欲望的部分 $\vee$ の $\wedge$ 欲望 $\vee$ と対立し争うことなく、各部分の有する $\wedge$ 欲望 $\vee$ という共通基盤において各部分が対立し争うことが可能になると考えられたからである。したがって、 $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ において $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ が $\wedge$ 支配 $\vee$ するためには、その知的レベルが必要な資格を満たすとともに、その $\wedge$ 欲望 $\vee$ が $\wedge$ 大 $\vee$ であることによって成立する

ものであらう。

(ii)

次に、 $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ についてそのあり方を考えていきたい。プラトンによると、 $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ は一種類であるのに対し、 $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ には多数の種類があると言う。その $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ に関してプラトンは四種類を取り上げ、対応する $\wedge$ 不正な国家 $\vee$ の名称をもって説明している。そこで、魂における $\wedge$ 支配 $\vee$ が、各部分の $\wedge$ 欲望 $\vee$ に帰せられる点からすると、 $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ は $\wedge$ 気概的部分 $\vee$ か $\wedge$ 欲望的部分 $\vee$ のいずれかが他の部分に比してその $\wedge$ 欲望 $\vee$ が $\wedge$ 大 $\vee$ であると考えられる。

しかし、 $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ については、次のような問題がある。それは、 $\wedge$ 欲望的部分 $\vee$ の支配する魂が $\wedge$ 寡頭制的人間 $\vee$  $\wedge$ 民主制的人間 $\vee$  $\wedge$ 僭主制的人間 $\vee$ の三種類語られている点である。魂の三部分説に従えば、いづれも $\wedge$ 欲望的部分 $\vee$ の支配する魂である。それにもかかわらず、三種類として、すなわちそれぞれが一つの「型」として語られているのである(cf. 549e)。それでは、同じく $\wedge$ 欲望的部分 $\vee$ が支配しながら、相互に「型」として区別されるのはどのようなことに基づくのであらうか。プラトンはこの三種類の魂の $\wedge$ 型 $\vee$ を特徴づけるために、 $\wedge$ 欲望的部分 $\vee$ の $\wedge$ 欲望 $\vee$ を $\wedge$ 必要な欲望 $\vee$  $\wedge$ 不必要な欲望 $\vee$  $\wedge$ 不法な欲望 $\vee$ と三分する。したがって、何がこの三種類の欲望を区別するのか、ということが問題になる。このような区別をするものとしては、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ の機能・働きしか考えられないのである。

以上のことから、 $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ は単に $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ 以外の部分の $\wedge$ 欲望 $\vee$ が $\wedge$ 大 $\vee$ であるというだけでなく、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ が重要な役割を果たしている。ある $\wedge$ 型 $\vee$ が成立するためには、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ が規定することが必要なことである。この点からすると、 $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ と $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ において、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ が「魂全体を配慮する」ということは、その内容は無論異なるにせよ、機能

的側面に限って言えば、変わらないと言える。では次に、魂における支配の変化と△理知的部分▽の「配慮」の内容の変化の関係を、第九巻に示される「人間の基本的三分類」に即して考えてみたい。

(iii)

プラトンは、第九巻で、魂の三部分のそれぞれが支配する「人間の基本的三分類」を提示している。そして、魂の三部分のそれぞれが固有の欲望と快楽を持つことを指摘し、この三種の快楽を比較検討した上で、△理知的部分▽が支配する△知を愛する者▽の生活が最も快的であると論じている。

しかし、ここで注目すべき点は、次の点である。プラトンは、△理知的部分▽が支配するときに「快楽に関して、各部分は自己の快楽、最善の快楽、そして可能な限りでの最も真実の快楽を獲得する」(586-587a)のであり、△理知的部分▽以外の他の部分のいずれかが支配する場合は「当の部分自身が自己の快楽を見出すことができないし、また他の部分にも自己のものではなく真実のものでもない快楽を追求させる」(587a)と言っている。この言葉に従えば、△理知的部分▽のみならず、△気概的部分▽や△欲望的部分▽もまたその快楽が三種類の人間において異なっているということになる。つまり、各部分に固有とされる快楽は、それぞれの固有な領域を逸脱することはないにしても、その魂のあり方△△型▽に応じて質的な変化を被るものだということになる。それぞれの快楽は欲望の対象によって規定される点からすると、魂のあり方△△型▽に応じて各部分の向かう欲望の対象が、すなわち各部分の働き・機能の向かう対象が規定されるということになるのである。これらのことから、次のことが明らかである。それは、魂の各部分の働き・機能は、当の部分だけで独立にそのあり様が決定されるものではないということである。部分間の△欲望▽の関係が、各部分の働き・機能のあり方を規定するものと考えられるのである。



〔3〕

では、以上の考察を踏まえながら最後に、魂がある行為をなすということの意味を考えてみたい。プラトンは、 $\wedge$ 正義 $\vee$ を先に見たように、魂の三部分の支配関係によって説明した上で「そのような（魂の）あり方を保全し、仕上げるような行為」を「正しく立派な行為」であると言い、逆に「そのような魂のあり方をつねに解体するような行為」を「不正な行為」と言っている（43e-44a）。他方、「正しいことをなすことは（魂のうち） $\wedge$ 正義 $\vee$ をつくり出し、不正なことをなすことは $\wedge$ 不正 $\vee$ をつくり出すことである」（44c-d）と言っている。

つまり、引用したプラトンの言葉からすると、魂は行為の原因として考えられるだけではなく、そのあり方が成立する $\wedge$ 行為 $\vee$ によって影響を受けるものであるということになる。では一体、 $\wedge$ 行為 $\vee$ は魂のあり方の何に影響を与えるものだろうか。我々は先の考察で、 $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ と $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ を取り上げて、魂のあり方が各部分の $\wedge$ 欲望 $\vee$ の関係と $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ の機能の二点によって説明されるものと解した。そこで、この二点について $\wedge$ 行為 $\vee$ との関係を考えなければならぬ。

先づ、 $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ について、それが $\wedge$ 正しい行為 $\vee$ をなす場合を考えてみたい。 $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ は $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ の「知恵がある」という点と、その部分の $\wedge$ 欲望 $\vee$ が $\wedge$ 大 $\vee$ であるという点で成立すると考えた。ところで「知恵がある」という点は、「知恵」だけでなく「正しい思わく」でも資格を満たすものであることを明らかにした。「知恵」であれば不動のものであり、何ら変化を受けるものではないが、「思わく」であれば「知恵」のように不動不変というものではない。そこで何らかの変化を考えることができるかもしれない。というのも、「保全」や「仕上げ」という言葉が何らかの変化を前提したものであるからである。しかし、「正しい思わく」をもって $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ が支配している魂が $\wedge$ 正しい行為 $\vee$ をなす場合、そのことでこの「思わく」が影響を受けるとは考えられないの

である。つまり、 $\wedge$ 正しい行為 $\vee$ をなすことによって、「思わく」が「知識」に変化するとは考えられない。たしかに「保全」という点だけから言えば、「正しい思わく」が「保全」されるということが考えられるが、「仕上げ」という点からみると、適当ではないのである。

そこで、 $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ が $\wedge$ 正しい行為 $\vee$ をなす場合に規定され影響を受けるのは、魂のあり方に関わるもう一方の $\wedge$ 欲望 $\vee$ の点と考えられる。 $\wedge$ 欲望 $\vee$ の場合、「保全」されるのみならず、「仕上げ」られるというように変化が考えられるものである。というのは、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ の $\wedge$ 欲望 $\vee$ が $\wedge$ 大 $\vee$ であることが「保全」されるだけでなく、より $\wedge$ 大 $\vee$ になると考えることができるからである。 $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ は、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ の $\wedge$ 欲望 $\vee$ が他の部分の $\wedge$ 欲望 $\vee$ に比べて $\wedge$ 大 $\vee$ であることが必要であるが、その度合いは様々な程度が考えられる。 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ の $\wedge$ 欲望 $\vee$ がより $\wedge$ 大 $\vee$ になればなるほど、その支配はより確固としたものになるであろう。このように考えれば、「保全」のみならず「仕上げ」の点も、 $\wedge$ 欲望 $\vee$ の場合は充分理解できるのである。

$\wedge$ 正しい行為 $\vee$ について言われた「保全」「仕上げ」はこのような仕方理解されたが、 $\wedge$ 不正な行為 $\vee$ の場合はどうか。不正な行為 $\vee$ が「魂の正しいあり方を解体する」と言われる場合、それは $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ にとっての意味である。 $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ が $\wedge$ 不正な行為 $\vee$ をなす場合、そのことの意味はどうなるのであろうかという問題である。 $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ の場合は一種類であったが、 $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ の場合は複数の種類が考えられていた。したがって、 $\wedge$ 不正な行為 $\vee$ もまた $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ の種類に応じて考えられるであろう。そこで、 $\wedge$ 不正な行為 $\vee$ が $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ の「影」として考えられる場合、その行為の成立によって、当の魂のあり方が変わるとは考えられない。したがって、ある $\wedge$ 型 $\vee$ の $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ がその $\wedge$ 型 $\vee$ に応じた行為をなすことは、ちょうど $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ が $\wedge$ 正しい行為 $\vee$ をなす場合と同じく、当の $\wedge$ 型 $\vee$ を保全することになるであろう。

さて、次に「正しい行為は正しい魂をつくり、不正な行為は不正な魂をつくる」といわれる点について考えてみたい。先に、行為は魂の在り方の $\wedge$ 欲望 $\vee$ に関わるものであると考えられた。しかし、もしそれだけであるならば、 $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ も $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ も成立しない。ここで問題になるのは $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ が $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ になったり、 $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ が $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ になったりという魂のあり方が変化する場合である。その場合、 $\wedge$ 欲望 $\vee$ の変化だけではすまないのである。 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ の変化もまた考えなくてはならないであろう。その点をどのように解すべきかが問題である。 $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ の場合、「知識」を有する $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ は変化を考えることができない。「知識」自体変化を受け入れるようなものとは考えられていないし、また「知識」を有する人間が $\wedge$ 不正な行為 $\vee$ をなすということとも考えられないであろうからである。問題になるのは、「正しいと思う」しか持っていない場合の $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ である。この場合、 $\wedge$ 欲望的部分 $\vee$ の変化が「思う」の変化を導くものであるか。我々は先に、各部分間の $\wedge$ 欲望 $\vee$ の関係と $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ のあり方を考えたとき、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ の $\wedge$ 欲望 $\vee$ が $\wedge$ 大 $\vee$ でなければ、それは本来の対象に向かえないと解した。その点からすると、 $\wedge$ 欲望 $\vee$ の関係が変化することで、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ は「正しいと思う」という本来の対象を持ちつづけることができずに、代わって「まやかしの思う」といったものを持つようになることを考えることができるであろう (cf. 560b-e)。

しかし、 $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ の場合はどうか。  $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ が $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ に変化するためには、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ の $\wedge$ 欲望 $\vee$ が $\wedge$ 大 $\vee$ にならない。  $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ の $\wedge$ 欲望 $\vee$ が $\wedge$ 大 $\vee$ になるためには、それがそもそも何によって充足されるかという点が問題になるであろう。先に見た $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ が $\wedge$ 正しい行為 $\vee$ によって「保全」あるいは「仕上げ」られるというときも、その充足するものは本来の対象である。だからこそ、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ の $\wedge$ 欲望 $\vee$ が $\wedge$ 大 $\vee$ になると考えられるの

である。したがって $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ の $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ を本来の対象で充足すれば、その $\wedge$ 欲望 $\vee$ が $\wedge$ 大 $\vee$ になるのである。そしてそのためには、 $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ が持っているような「正しい思わく」を持ってそれに基づいて行為しなければ、本来の対象で充足されないであろう。

無論、 $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ の $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ は「正しい思わく」を持っていないのであるから、そのままでは $\wedge$ 正しい行為 $\vee$ をなすことはできないであろう。しかし、プラトンは、自分自身で持ち得ない場合、他からの $\wedge$ 知 $\vee$ に従うことによって、 $\wedge$ 正しい魂 $\vee$ になることができると言っている (cf. 590c-591a, 500d-501c)。したがって、 $\wedge$ 不正な魂 $\vee$ は「正しい思わく」を自分以外の者に基づくにせよ、それを受け取りそれに従って行為をなすことによって、 $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ は本来の対象によって充足され、その $\wedge$ 欲望 $\vee$ は増大すると考えられる。このことによって、部分間の $\wedge$ 欲望 $\vee$ の関係が変化することは可能になるのである。

以上、 $\wedge$ 行為 $\vee$ が $\wedge$ 魂 $\vee$ に対して持つ意味を明らかにしてきた。それによると、 $\wedge$ 行為 $\vee$ は $\wedge$ 魂 $\vee$ の部分の $\wedge$ 欲望 $\vee$ に影響を与えると考えられる。そして、部分間の $\wedge$ 欲望 $\vee$ の關係の保全あるいは変化が、その結果として $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ のあり方を規定するものと考えられる。たしかに、 $\wedge$ 欲望 $\vee$ の關係の変化が $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ における変化をいわば自動的に生み出すとは言えないであろう。しかし、すでに見たように、部分間の $\wedge$ 欲望 $\vee$ の關係は $\wedge$ 理知的部分 $\vee$ の機能のあり方に影響を与え規定するものである。そして、 $\wedge$ 行為 $\vee$ はその $\wedge$ 欲望 $\vee$ の關係に関わるものであるから、 $\wedge$ 魂 $\vee$ のあり方に影響を与え、それを規定するものであると考えられるのである。